

元・警視総監 井上 幸彦氏

重い決断の連続だった 地下鉄サリン事件の舞台裏

弁護士としては珍しい企業経営者との「二刀流」でも知られる田邊勝己弁護士が各界のリーダーを訪ねる特別企画。今回は、警察庁入庁の同期・亀井静香氏とともに犯罪者を震え上からさせた第80代警視総監・井上幸彦氏を再訪。来年の3月20日で発生から30年を迎える地下鉄サリン事件について、陣頭指揮を執った捜査の舞台裏などについて訊いた。

聞き手／弁護士法人カイロス総合法律事務所 代表弁護士 田邊勝己氏

重任を一身に背負った 教団施設の強制捜査

田邊 地下鉄サリン事件の発生当時、私は30代でした。当日は10時間延の裁判で霞が関の東京地方裁判所に向かっていたのですが、霞ヶ関駅付近は大パニックに陥っていたことを覚えていています。

井上 あの電車に乗っておられたのですか？

田邊 いえ、たまたま車で出かけたので難を逃れたんです。あの忌まわしい事件からもうすぐ30年が経ちますが、いま振り返っていかがですか。

井上 オウム真理教との戦いは拳庁一体、全部署が一丸となってやり遂げたものです。その後も現在に至るまでテロや凶悪事件が続発しています。あの時の経験は警察の捜査能力の向上を促す契機のひとつとして、今も確実に活かされていると思います。

田邊 あの事件では警視総監として陣頭指揮を執られました。当時は内閣危機管理室などもありませんでしたから、3月22日の上九一色村の教団施設への強制捜査では最高責任者としての重



任者としての重圧を一身に背負われました。当初からの準備さ

井上 それはもう、各方面からご意見をいただきましたが、どなたも明確に「止めろ」とは言いませんでした。世論の後押しもあり、凶悪事件に怯まず「今この時」を判断できましたが、その裏付けとして警視庁の高度な情報収集能力があったんです。

田邊 当時の報道では「麻原はもう脱出したのではない」「刺殺するとまたサリンを撒かれるのでは」と心配する向きも多かったと記憶しています。確認はあったのですか。

井上 はい。詳細は明かせないのですが、「間違いなく教団施設内にある」「サリンはもう残っていない」と確信できるだけの捜査情報がありました。別の場所に潜伏しているという情報も飛び交いましたが、あれは教団側の攪乱だということも分かっていました。

田邊 あれから長い時間が過ぎて、最近はいくつかの攻撃やトクリュー(匿名・流動型犯罪グループ)による「闇バイト」などが社会問題化しています。新たな形態の犯罪だけに、警察の真価が問われますね。

井上 犯罪は年々高度化していきませんが、防犯カメラのりり捜査など捜査能力も大きく進歩しています。日本社会の安心安全を背負う者として、変えるべきは変え、守るべきは守りながら、警察組織も日々進化を続けて欲しいですね。

く見つからなくて日本中が心配しましたね。指揮官が恐れていた、何もできませんからね。

田邊 発見に至る経緯は、**井上** ある捜査官が、建物の梁に出っ張った部分があることに気がつきましてね。「壊してみろ」と指示したところ、奥に麻原が潜んでいたんです。**田邊** 巧妙な隠れ方でしたよね。それにしても、オウム真理教が起こした一連の事件に対する捜査は、重い決断の連続だったのでは。

PROFILE
第80代警視総監。1962年に警察庁に入庁し、警務局人事課付に配属。以降、第六機動隊長、公安部外事第二課長、警備局警備課長、警備部長、長官官房長、警務局長を歴任し、1994年に警視総監に就任。オウム真理教事件の捜査で名を馳せ、1997年の退官。その後国内の重要イベントなどで危機管理強化に貢献している。2008年、瑞宝重光章。

井上 幸彦
いのうえ・ゆきひこ

PROFILE
弁護士。中央大学法学部法律学科卒業後、司法試験に合格し、1989年弁護士登録。第一東京弁護士会を経て、大阪弁護士会所属。東京簡易裁判所民事調停委員、東京地方裁判所破産管財人、第一東京弁護士会常議員を歴任。また、東証スタンダード上場THE WHY HOW DO COMPANY株式会社の筆頭株主兼代表取締役会長、伊香保ゴルフ倶楽部理事長を兼任。取扱分野は民事法、刑事法、刑事法、企業再建法、M&A法、資金調達、スタートアップ支援。

田邊 勝己
たなべ・かつぎ